

GALLERIES HOLLYWOOD



木枠の中にできたおびただしい数の蚕の蛹は、熱せられ、死を迎え、やがて角永和夫作品「Silk No.1」として、スペースギャラリーで展示される。

昨年、角永和夫は日本で大量の蚕を購入してきた。梱包用の発泡スチロールに似た白い繭の中で気持ちよく過ごしている小さな蚕達にとって、自分達が現代美術という名のもとで死ぬべき運命にあるということは、おそらく想像もつかなかったことに違いない。なにしろ、彼らの祖先は最高の生地になるために、その命を捧げてきたのだから、...

角永は、まずその幼虫達が住めるような空間を構築した。それらは幾何学的な蜂の巣状で、一つの真四角な区画の中に一匹の蚕が入れるように作られている。蚕は自ら好みのスロットの中に入り、繭を作る。その時点で熱を加えることにより、Silkを生み出すプロセスをそのまま捕らえることができる。つまり、その瞬間に幼虫達は死んでしまうのである。悲しいかな、その哀れな蛾たちの一世代は、またたくうちに消滅してしまっただけである。

角永は、最小限に手を加えることによって、その物が内在する姿を引き出せるようにしたものが自分の作品だ、と述べている。前回の企画を例にとると、1本の木からブロックを切り取り、乾燥させることで起こ

る「割れ」と「膨張」のプロセスを見せる、という作品であった。その乾燥こそが唯一の介入であった。その作品で、カドナガは既に存在しているプロセスを改めてさらけ出し、より強く示す、ということに成功したと言える。しかしながら、今回発表した”SILK No.1”で用いられた方法というのは、多少介入の度合いが大きい気もするが、...

生態学者達は今回彼が取った方法を認めようとはしないであろう。が、その結果として生まれた作品を見た時に、この一種不気味とも言える美を否定することもできないのではないだろうか。ギャラリー内に展示されている作品には、驚くほど様々な種類がある。早い時期に熱を加えられたものは、機械的なおもむきを呈し、もう少し長く生きながらえたものは、Silkの透き通るようなヴェールに包みこまれている。今回の”SILK No.1”には、強く心に訴えるようなはかなさがあるが、それは重苦しい死の匂いによるものかもしれない。

(スペースギャラリー、3月28日まで)